

手をつなぐとも

等友

S
60
10
1生

〒111-0041
台東区元浅草
2-10-17
3841-2844
浄土真宗
勝龍山
等覚寺
住職
朝倉馨

平成25年9月
第99号



盂蘭盆会法要 (等覚寺本堂にて)

生きてる間はお医者さん
死んだらお寺のお坊さん

こんな大きな間違いはない

仏法は生きるためのもの

攝取不捨のご本願を信じ、お念佛を称えれば淨土往生の決定される私共にとつて最も大切なことは、死ぬまで現生でどう生かしめられるかということではないでしょうか。

私共は一年一年年老いてゆく身ですが、心構えはできていますか。その時になつて考えるのでは遅いですよ。あなたはいつか家族の誰かと別れねばなりませんが、覺悟はでけていますか。あなたは、いつかきっと何らかの疾病と付き合わねばなりませんが、心の用意はでけていますか。その時に考えるのでは遅いですよ。釈尊をはじめ、歴代の善知識たちは、私たちのためにその生き方を説かれたのです。葬式とか墓とか仏壇の形式について説かれたわけではありません。

住職から一言

皆さんのおたたかい心に包まれて九十九歳となりました。

今は家族の看護を受ける日々。大変な面倒をかけ、今一度お檀家さんお一人お一人のご恩を思い出しています。心に浮かぶのはお礼の言葉だけです。

お元気にナムアミダブツと長生きしてください。

九十九歳ボケ老住職

住職は現在九十九歳で年齢なりに元気にしておりますが、七月のお盆前、歩いているときにバランスを崩し、背中を壁に強打してしまいました。その結果圧迫骨折を起こしてしまい、いまは療養中です。主治医によると痛みが相当あり、本人にとつて寝返りひとつ出来ないくらいのことですが、がんばって家族と一緒に食卓について椅子に座つて食事をとっています。私たち家族も、次回の報恩講にはみなさん直接住職がご挨拶できるようにしたいと思つてサポートしております。（翔）



盂蘭盆会の汇报

平成二十五年七月十五日に等覚寺本堂にて盂蘭盆会（うらぼんえ）が勤されました。当日は午前午後で初盆の方とそれ以外の方で分けさせていただきましたがおかげさまでどちらも多くの方にいらっしゃっていました。満堂でのお勤めをすることができました。天気にも恵まれご先祖さまの教えに再び遇ういい機会となれたのではないでしょうか。

また次回もみなさまぜひお気軽にお参りください。

せっかくですので、副住職（釋創龍）の法話をこちらにもご紹介させていただきます。

○お盆って？

お盆というのは正式には盂蘭盆（うらぼん）といいまして、難しい字を書きます。

この盆だけとつてお盆と呼んでるわけですね。そもそもは仏教の始まつたインドの昔の言葉、サンスクリット語（凡語）でウラバーナという言葉がございました。ウラバーナという言葉が中国に伝わり漢字にてはめたのがこの言葉なんですね。ですのと、漢字自体には意味はございません。ではこの言葉はどのような意味なのかというと、逆さ吊りの苦しみを表す言葉なんだそうです。逆さ吊りの苦しみというと非常にまあ物騒な言葉ですけれども、今日お読みした表白（ひょうびやく）の中にも目連（もくれん）という名前が聞こえたかもしませんが、お釈迦様の弟子の一人で、この方は神通力を持つていて方でした。あるとき亡き母が向こうの世界でどうしてくるか

とその神通力をもつて見たそうです。するとお母さまは餓鬼道という世界に落ちて、餓鬼として逆さ吊りにされ苦しんでおり、これは大変だということで、なんとか助けようと食べ物や水やいろんなものを届けようとしたんですが、お母さまの口に運ぶ寸前ですべて炎になつて燃え尽きてしまいました。目連はお釈迦さまにどうすればいいかとご相談したなんですね。するとお

釈迦さまは、雨期の明ける安居（あんご）の時期、今でいう七月十五日に、修行から帰つてくる僧侶たちを集め、仏法僧の三宝に対する供養をみんなでしなさいと、そうすることによつてお母さまは救われるでしょうと言われ、その通りにしてお母さまは救われました。それが書かれているのが盂蘭盆経というお経です。ここから来ているのがお盆の由来です。日本におきましては、この仏教による由来とともに、日本の

古来から伝わる靈信仰・民俗信仰的なものと混ざつて今日のお盆があると言われています。

※三宝（さんぽう）

・・・仏教で一番大切なものの

- ・ 仏 仏さま
- ・ 法 教え
- ・ 僧 僧伽（さんが）一緒に教えを

聞く集まり

みなさんでお勤め前に読む三帰依文は
この三宝に帰依しますという宣言です



それはどのようなものかと言うと、よく三日から十五日の間の三日間だけ地獄のふたが開いて、ご先祖が帰つてこられる。そのご先祖が迷わないよう迎え火・送り火を焚きます。またはキユウリで作ったお馬さんとかナスで作った牛さんを飾ります。これは来る時には馬に乗つて早く来てもらつて、帰りは牛でゆっくり帰つてもらうという意味です。これらは仏教ではなく、日本古来からの民俗信仰からできた習慣なんですね。これが混ざつて今日のお盆があるということになります。よくみなさんに淨土真宗ではお盆ではお飾りは必要ですかって聞かれますが、淨土真宗の場合は一切そいつたお飾りまたは提灯などはお飾りしなくて結構です。同様に迎え火送り火も焚かなくて結構です。三日間だけ地獄のふたが開くといいますが、本当にご先祖さまは地獄にいるんでしょうか。また、盂蘭

盆経では餓鬼道（餓鬼道とは六道輪廻の一つで地獄の一歩手前の迷いの世界のこと。六道……天界、人間界、修羅、畜生、餓鬼、地獄）にいると書かれていますが、はたしてご先祖様はそういう苦しみの世界にいるのかどうかということを一つ考えなければいけません。そして迷いの存在として、火をこちらで焚かなければ戻つてこれないのかということ、お馬さんで早く帰つてきてほしいけど帰りは牛さんでゆっくり帰つてほしいということ、今で言うと行きは新幹線だけど帰りは各駅停車みたいなものですね。行きも帰りも新幹線で送つてあげた方が、なるべくこちらにゆっくりいれるんじゃないかと私自身は考えてしまうんですね。（笑）要は、こちらの都合で迎えて送つてるんじゃないかということですね。そういう側面があるんじゃないかと私自身疑問に思っていました。

○日本人と死

古来から私たち日本人は死や死者を忌み嫌つてました。なるべく死や死者を自分から遠ざけようと、それこそ棺に釘打ちをしたり茶碗を割つてみたり棺をぐるぐる回して目を回させたり足を折つたりすることもありました。今でも葬儀の後に清め塩を配つたりですとか、あい箸・あいばさみといつて、一つのお骨を二人で一緒につまんだりします。これも死のけがれがどちらか一方に来ないようとにいいう意味合いです。

そういった習慣が現在でも続いているように、日本人は極端に死を自分から遠ざけようとしてきました。今でも新興宗教なんかでは、ご先祖供養が足りないから悪いことが起こつてゐるんだとか、今の自分に起きている悪いことをあたかもご先祖のせいとしている。本当にこれはお釈迦様の説かれた仏教とはまったく異なることなんですね。生き

ている人間の都合の悪いことはすべて見えないもののせいにして、都合のいいことはすべて自分のおかげとする。そういう私たちのあり方がここに見えるんじゃないでしょうか。



○浄土真宗におけるお盆と目連

では淨土真宗においてお盆はどう迎えればいいかということですが、近しい人との死別というのは、生きてる私たちにとつて見つめなおす大切なご縁となります。そういう意味で、先ほどの清め塩などをしないだけでなく、ぜひ近しい方を亡くした大切なその時こそ、悲しいから早く忘れたことを見つめて、そのことを通して、死を我がこととしていく、死を自分のこととして受け止め、今の生、いのちの部分をしつかりと輝いたものとしていく。その機縁が、近しい方との死別であり、またはお盆やお彼岸のありかたなんじやないかなと思うんです。

ではなぜ目連はお母さまを逆さ吊りと見たのかということなんですが、お母さまは

本当は餓鬼道に吊るされていなかつたのではないでしようか。実際は、日々迷つたり苦しんだりしている私たちが、自己都合でなんでも考えてしまつてはいる私たちが勝手に、お母さまが逆さ吊りになつてゐるかのように見てしまつたんじやないかと思うんですね。要は私たちの煩惱にまみれた考え方ですね、死者を忌み嫌つてきたという歴史もありますから、私たちがそのように見てしまつたんじやないかということなんですね。本当はそんなことはなかつたし、お釈迦様も実はそのことにお気づきになつていたからこそ、目連に対してもういう自分の在り方を気付きなさいということで、仏法僧に対してあらためて帰依しなさい、あらためて考えて自分を見つめなおしなさいということを言つたんじやないかなと私は思うわけです。つまり、目連が神通力を使つて餓鬼道に落ちていたお母さまを救つたと

いう単純な物語では決してなくて、その話の中には日々の私たちの在り方、亡き人を時に都合良く、時に都合悪くとらえてしまう私たち、そういう姿をこの盂蘭盆経の中で教えられてるんじゃないでしょうか。そしてそのことに気づいてくれと願つておられるのが本堂の真ん中にいらっしゃる阿弥陀如来さんなのです。南無阿弥陀仏という六字の姿をもつて私たちに呼びかけて下さっている。それが浄土真宗の本当に大切な教えでございます。今日弟が最後に御文（おふみ）というものを読みましたが、この御文の中では、蓮如上人からの教えとして、南無阿弥陀仏という六字の姿は、我らが極楽浄土に往生する姿をあらわしたものであると書かれていました。決して南無阿弥陀仏は呪文ではありません。よくテレビのコントの中でも、なまんだぶなまんだ

ぶってなにか悪く言うように使いますから、本来は南無阿弥陀仏というのではなく、私たちが平等に救われていく姿をあらわすものであります。つまり私たちが常になまんだぶつと手を合わせるのは、常に救つてくれようと願われている阿弥陀如来さんやご先祖さまに対し感謝する気持ちをあらわしているのです。そういうことをぜひ一度お考えいただきたいと思いました。お話をさせていただきました。

○お内仏（お仏壇）とお寺

みなさまのご自宅にもいろんな形のお仏壇があるかと思います。そもそもお仏壇というのは、亡くなつた方のお家ではございません。よくそのように考えられていますが本来はそうではなくて、お寺の本堂内の須弥壇（しゅみだん）と呼ばれるお淨土

をかたどつたもののミニチュア版がお仏壇なのです。ですから亡き人がお仏壇に住んでいるから手を合わせるのではなくて、私たちを救つて下さろうとする阿弥陀如来さんやご先祖さまを常に思い描き、そしてまた日々の自分の在り方を見つめなおせるように手を合わせるのがお仏壇であります。そういったものが生活空間の中にあるという素晴らしさをこれを機縁に考えていただきたいなと思ってお話をしさせていただきました。

そして最後になりますが、お寺というのも決して亡き人のためにだけあるのではなくて、もしくは死んだあとにお世話になる場所では決してございません。むしろ、日々いろんなことに悩んだり苦しんだり煩恼を抱えたりしている私たちのために、あらためて教えを聞いていく、そして教えを聞いて日々またあらたに生

きていく力、または生きる意義を見つけ力、または生きる意義を見つけていただく、そういう場所がお寺であります。ですから今日もたくさんの方が来ていただいて本当にありがとうございます。そういったことでございましたし、お盆以外にも年に四回合同法要がございますので、今後もお気軽に足をお運びになつて私たちと一緒に、生まれてきた理由や生きていく意義・本当のよろこびというのを見つけていっていただきたいなと思います。



お布施の意味

みなさん、突然ですがお布施って言われたらどのようなことを想像しますか？

一般的にはお寺で法事を勤めるときや通夜葬儀の際に包むことが多いと思います。ですから僧侶がお経を勤めることへのお礼って思つてらっしゃる方が多いかもしれません。しかし実はそうではないんです。

そもそもお布施という言葉はサンスクリット語の「ダーナ」からきています。檀那(だんな)寺とか、檀家(だんか)という言葉も、ここからきていますが、「ダーナ」とは「あまねくほどこす」という意味で仏教の行の一つでした。

布施には、法施(ほうせ)、財施(ざいせ)、無畏施(むいせ)の三つがあります。法施とは、人が正しい生き方をするためにはなくてはならない仏法を説き、無形の精神的な

ほどこしをするもので、これは僧侶のつとめです。この法施にたいして、感謝の気持ちを、金品で表して、お寺へほどこすことを財施といいます。無畏施とは、不安や畏(おそ)れを抱いている人にたいして、安心のほどこしをし、取り除くことです。現在のお布施はこのうちの財施のことを主に指すようになりました。つまりお布施というのは、僧侶に対して渡すものではなくて、お寺のご本尊にお供えするものなのです。

ですので、ご法事の際はお布施は始まる前にお預けください。ご本尊にお供えし、お勤めさせていただきます。また、どのようにも包めばいいか・いくら包めばいいのか等わからないことがあれば、お気軽にお問い合わせください。直接聞くのはお寺さんに失礼ということをよくお聞きしますがそんなことはありません。仏事のことですか何でもご相談ください。

法事の時って何を持っていけばいいんだろう？

○必要なもの

- ・お布施
- ・お花代(本堂にお飾りする)

お花代で、一万円の実費)

・供物

○ご希望によつてお持ちください

- ・過去帳や位牌
- ・遺影(小さいもの)

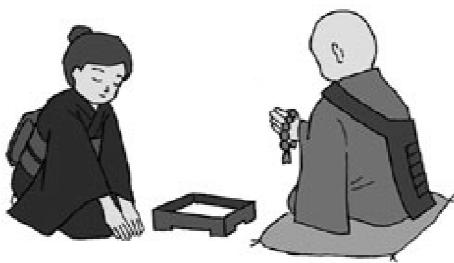
※お寺へお包みいただく表書きは全て「布施」と書いていただければ結構です。浄土真宗の場合
は「読経料」「ご靈前」という言葉は用いません。

等友へのご懇志

小笠原様 栗本様 高橋様 山本様
(順不同)

ご披露

いつもご支援いただきまして、誠にありがとうございます。また、他にも多数の方から等友へのご支援をいただいております。
(申し訳ございませんが、お名前には漏れがあるかと存じます。おっしゃっていただければ次号以降に順次ご紹介させていただきたいと思います)



編集後記



「ここにあは、釋 翔雲（弟・翔）です。最近は異常に暑い日が続いていますね。外出すると肌がヒリヒリ焼かるような感じです。家中でも室温が高じと熱中症になつてしまつたのでは? 気を付けてくださいー。」

さて、今回は住職の「」をお伝えさせていただきました。やはり九十九歳にもなると、少しづつただけでも骨が折れてしまつんですね。最初は動くたびに痛がつていたのでその姿を見ていると本当にうだうだうなと感じてきました。

圧迫骨折は年齢に関係なく起る病気です。折ってしまつたら他の部分と違つて、ギプスをするでもなく絶対安静で寝たままで過ごして治療するのです。けれど住職の場合は高齢といふこともあるので医師からは寝たまゝになりなさいよ、動かさないんだつたら少しでも動かすよう指

示されたので、家族で協力してなるべく住職が体を動かせるようにサポートしています。たぶん住職にしてみれば、痛いのにつらう感じをさせると内心思つてゐかもせんが（苦笑）痛がる姿を見るとこわいと心配にもなりますが、食事の時はきちんと食卓で椅子に座つて「」はんを食べていふので、その姿を見るとうし安心します。「」だけの話、夜は少しだけお酒も飲んでゐるんですよ（笑）ケガをしてから1ヶ月が経ち、当初よりむだだいび回復して動きやすくなつてしまつたように思います。引き続き家族一丸となつて治療してもらいたいと思つてますので、これからも「」の支援をよろしくお願いしますー。

平成二十五年行事予定

九月二十日～

二十六日

秋のお彼岸

十月五日（土）

いのちのふれあい
ゼミナール

十月十四日・十五日

等友旅行会

十月二十七（日）

報恩講

◎みなさまお誘い合わせの上、
お気軽にご参加ください。

(※ゼミナールについては別紙ご案内をご覧ください)

平成二十五年 年回表

一周忌

平成二十四年

三回忌

平成二十三年

七回忌

平成十九年

十三回忌

平成十三年

十七回忌

平成九年

二十三回忌

平成三年

二十七回忌

昭和六十二年

三十三回忌

昭和五十六年

三十七回忌

昭和五十二年

四十三回忌

昭和四十六年

四十七回忌

昭和四十二年

五十回忌

昭和三十九年

七十年忌

昭和十九年

百回忌
大正三年